

シェイクスピアの劇団における少年俳優の 演技とグラマースクール教育の接点

木村 明日香

1. 序

初期近代ロンドンの成人劇団で活躍した少年俳優に関する研究は 20 世紀前半の W. Robertson Davies の単著から実質的に始まり、1980 年代に Lisa Jardine、Kathleen McLuskie らフェミニスト批評家が異性装の効果を論じる形で注目を集めた¹⁾。多くの批評家が少年俳優の曖昧なジェンダーとその性的魅力を論じ、中でも Stephen Orgel は少年俳優の性的魅力を徒弟としての従属的立場に求め、成人劇団における徒弟制度の重要性を前景化した²⁾。Orgel の研究は Robert Barrie と David Kathman によって補完され、Barrie はギルド登録以外にも少年俳優の雇用形態として教区徒弟

-
- 1) W. Robertson Davies, *Shakespeare's Boy Actors* (London : J. M. Dent, 1939 ; repr. New York : Russell & Russell, 1964) ; Lisa Jardine, *Still Harping on Daughters : Women and Drama in the Age of Shakespeare* (Brighton : Harvester, 1983), Chapter 1 ; Kathleen McLuskie, 'The Act, the Role, and the Actor : Boy Actresses on the Elizabethan Stage', *New Theatre Quarterly*, 3 (1987), 120-30.
 - 2) Stephen Orgel, *Impersonations : The Performance of Gender in Shakespeare's England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1996), Chapter 4 ; Susan Zimmerman, 'Disruptive Desire : Artifice and Indeterminacy in Jacobean Comedy', in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 39-63 ; Peter Stallybrass, 'Transvestism and the "body beneath" : Speculating on the Boy Actor', in *Erotic Politics*, ed. by Zimmerman, pp. 64-83 ; Richmond Barbour, "'When I Acted Young Antinous" : Boy Actors and the Erotics of Jonsonian Theater', *PMLA*, 110.1 (1995), 1006-22.

などがあった可能性を指摘し、Kathman は教区やギルドの関連資料から多くの少年俳優の経歴を明らかにしている³⁾。

こうした中、少年俳優が受けた演技指導にも関心が寄せられている。戯曲を少年俳優に演技を教えるための〈教材〉として再解釈したのは James L. Hill、Katherine E. Kelly が嚆矢である。Hill はシェイクスピア悲劇における女性のセリフが複数のブロック ('blocks') から構成されていると指摘した。Richard Burbage らベテランの成人俳優と異なり、少年俳優の演技は未熟だったため、ブロックごとに登場人物の性格や心情を割り振り演じやすいよう配慮したという。一方、Kelly は少年俳優の演技力の伸びしろに注目し、シェイクスピア喜劇において異性装のヒロインたちがプロットを導く重要なキャラクターへと成長するさまは、少年俳優の演者としての成長と重なると論じている⁴⁾。

戯曲に少年俳優の演技指導の痕跡を求める試みはその後、Catherine Belsey、Richard Madelaine、Scott McMillin、Evelyn Tribble に継承された。Belsey はシェイクスピアがしばしばプロット上必要のない脇役を登場させることに注目し、新入りの少年俳優に舞台慣れさせるための工夫だと論じた。Madelaine はシェイクスピアが役をあてがきしたことを前提に、異性装のヒロインは少年俳優が成人俳優／男役になる前の準備期間だったと述べている。一方、McMillin はセリフの合図 (cue) をやり取りする人数によって少年俳優の役を 'restricted roles' と 'wide-ranging roles' に分類

-
- 3) Robert Barrie, 'Elizabethan Play-Boys in the Adult London Companies', *SEL*, 48.2 (2008), 237-57; David Kathman, 'How Old Were Shakespeare's Boy Actors?', *Shakespeare Survey*, 58 (2005), 220-46; David Kathman, 'Grocers, Goldsmiths, and Drapers: Freeman and Apprentices in the Elizabethan Theater', *Shakespeare Quarterly*, 55.1 (2004), 1-49; David Kathman, 'John Rice and the Boys of the Jacobean King's Men', *Shakespeare Survey*, 68 (2015), 247-66.
 - 4) James L. Hill, "'What, are they children?'" Shakespeare's Tragic Women and the Boy Actors', *SEL*, 26.2 (1988), 418-40; Katherine E. Kelly, 'The Queen's Two Bodies: Shakespeare's Boy Actress in Breeches', *Theatre Journal*, 42.1 (1990), 81-93.

し、それぞれのリハーサルの仕方を記述している。Tribble は発達心理学の知見を生かして McMillin の議論を発展させ、少年俳優の力量よりもやや難しい役を与えて成長を促す ‘scaffolding’、成人俳優が少年俳優を引率して舞台に登場する ‘shepherding’ など、演技指導のさまざまな用語を提唱した⁵⁾。

このように少年俳優の演技指導が広く論じられる一方、彼らが入団前に習得していたスキルは十分に検証されていない。Kathman によれば、ロンドンの成人劇団で女性を演じた少年俳優の年齢層は 12 歳から 21 歳、もしくは 22 歳であり、このことは少年俳優の多くがグラマースクール教育を受けたのち入団したことを示唆している⁶⁾。当時のグラマースクールには 7 歳前後から 10 代半ばの子供が通い、ラテン語などの古典語を学んだが、生徒の多くは入学前から付属校 (petty school) で英語の読み書きと教理問答を学んだ⁷⁾。John Astington が述べる通り、少年俳優は台本を読む生業に就く以上、英語の読み書きは学んだはずであり、当時の戯曲に古典の影響が強いことをふまえると、古典の教養も求められた可能性は高い⁸⁾。実際、劇作家の Thomas Heywood は *An Apology for Actors* (1612) の中で、役者になるのは ‘schollers’ が望ましいとしている。

-
- 5) Catherine Belsey, ‘Shakespeare’s Little Boys’, in *Rematerializing Shakespeare*, ed. by Bryan Reynolds and William N. West (London : Palgrave, 2005), pp. 53-72 ; Richard Madelaine, ‘Material Boys : Apprenticeship and the Boy Actor’s Shakespearean Roles’, in *Shakespeare Matters : History, Teaching, Performance*, ed. by Lloyd Davis (Newark : University of Delaware Press, 2003), pp. 225-38 ; Scott McMillin, ‘The Sharer and His Boy : Rehearsing Shakespeare’s Women’, in *From Script to Stage in Early Modern England*, ed. by Peter Holland and Stephen Orgel (London : Palgrave, 2004), pp. 231-45 ; Evelyn Tribble, ‘Marlowe’s Boy Actors’, *Shakespeare Bulletin*, 27.1 (2009), 5-17.
 - 6) Kathman, ‘How Old’, p. 220.
 - 7) T. W. Baldwin, *Shakespeare’s Small Latine & Lesse Greeke* (Urbana : University of Illinois Press, 1944), vol. 1, pp. 441-42 ; Jonathan Bate, *Shakespeare and Ovid* (Oxford : Clarendon Press, 1993), p. 19.
 - 8) John H. Astington, *Actors and Acting in Shakespeare’s Time : The Art of Stage Playing* (Cambridge : Cambridge University Press, 2010), p. 2.

Actors [...] should be rather schollers, that though they ca[n]not speake well, know how to speake, or else to haue that volubility that they can speake well, though they vnderstand not what, & so both imperfections may by instructio[n]s be helped & amended : but where a good tongue & a good conceit both faile, there can neuer be good actor.⁹⁾

彼らには「優れた弁舌と想像力」(‘a good tongue & a good conceit’)があり、最初は言い回しが下手だったりセリフの理解が不十分だったりしても、「指導」(‘instructio[n]s’) で補えるのだという。scholar はグラマースクールの生徒と大学生の両方を指す言葉だが、Heywood は大学進学が確認されていない Edward Alleyn を例に挙げており、グラマースクールを念頭においた発言であることは間違いない。

ではグラマースクール教育が少年俳優たちに授けた ‘a good tongue & a good conceit’ とはどのようなスキルであり、劇作家や成人俳優たちはそれをどう活用したのか。シェイクスピアをはじめとする作家の創作活動にグラマースクール教育が与えた影響は T. W. Baldwin、Jonathan Bate、Brian Vickers、Richard Halpern、Lynn Enterline など多くの批評家が論じているが、本稿ではこうした研究をふまえつつ、Carol Chillington Rutter、Harry R. McCarthy に連なる形で考察対象を少年俳優に移し、グラマースクール教育と劇場の新たな接点を探りたい¹⁰⁾。Rutter は少年俳優

9) Thomas Heywood, *An Apology for Actors* (London, 1612), sig. E3^r.

10) Baldwin, *Small Latine*; Bate; Brian Vickers, ‘Shakespeare’s Use of Rhetoric’, in *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, ed. by Vivian Salmon and Edwina Burness (Amsterdam: John Benjamins, 1987), pp. 391-406; Richard Halpern, *The Poetics of Primitive Accumulation: English Renaissance Culture and the Genealogy of Capital* (Ithaca: Cornell University Press, 1991), Chapter 1; Lynn Enterline, *Shakespeare’s Classroom: Rhetoric, Discipline, Emotion* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012); Katie Knowles, *Shakespeare’s Boys: A Cultural History* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2014); Darryll Grantley, *Wit’s Pilgrimage: Drama and the Social*

による女性の演技が、衣装や化粧などの容姿以上に、女性として語る技術に依拠した点に注目し、こうした雄弁術がグラマースクールで培われた可能性を指摘している。Rutterの主張は結果的に正しいものの、彼女が拠り所にするのはアウグスティヌスの時代・地域を扱った Marjorie Curry Woodsの研究であり、論証の手続きは不十分である。よって本稿では16、17世紀イングランドの教育論や教材を調査し、これを補完することを目指す。また McCarthy はグラマースクールで教えられた芸当やスポーツが2つの子供劇団の演目に組み込まれていると指摘しているが、シェイクスピアの劇団である宮内大臣一座／国王一座を含めた成人劇団は論じられていない。成人劇団についても、少年俳優の演技とグラマースクール教育の間に相関関係が認められるのかも検証したい¹¹⁾。

まずは16世紀におけるグラマースクール発展の経緯を、役者を含めた中産階級の貢献に焦点を当てて整理する。次に、宮内大臣一座／国王一座の役者たちがどの程度グラマースクールに通ったといえるのかを論じた後、グラマースクールのカリキュラムのうち特に女性の演技と関わりのあるスピーキングとライティングに注目し、少年俳優が習得したと思われるスキルを明らかにする。最後にシェイクスピアがこれらのスキルをどのように生かして戯曲を執筆した可能性があるのか、複数の初期作品から論じていく。

Impact of Education in Early Modern England (Aldershot : Ashgate, 2000).

- 11) Carol Chillington Rutter, 'Learning Thisby's Part – or – What's Hecuba to Him?', *Shakespeare Bulletin*, 22.3 (2004), 5-30; Harry R. McCarthy, *Boy Actors in Early Modern England: Skill and Stagecraft in the Theatre* (Cambridge: Cambridge University Press, 2022); Marjorie Curry Woods, 'Weeping for Dido: Epilogue on a Premodern Rhetorical Exercise in the Postmodern Classroom', in *Latin Grammar and Rhetoric: From Classical Theory to Medieval Practice*, ed. by Carol Dana Lanham (London : Continuum, 2002), pp. 284-94.

2. グラマースクールの発展と中産階級

よく知られる通り、グラマースクールは「地元の子供（通例は男子）に無償もしくは助成金による教育を提供する学校」であり、「ラテン語が常にかリキュラムの重要な部分を占めていた」¹²⁾。‘grammar school’ という語の初出は 14 世紀だが、ラテン語教育を軸とする初等・中等教育機関は 597 年設立の King’s School, Canterbury が最古である¹³⁾。12 世紀の大学設置以前の学校はすべて教会組織と関わりがあり、ラテン語教育は聖職者養成の一環として重視された。大学設置後はその予備校として Eton College など教会から独立したグラマースクールが設立されたが、カリキュラムは聖職者養成と連動していた。聖職者は 7 歳で剃髪した後、14 歳まで学校に通いながら司祭の手伝いをし、大学で神学を修め、25 歳で定職に就くのが一般的だったが、16、17 世紀の文献でもグラマースクールの入学年齢を 7 歳、男性の自立を 25 歳と定めるものが多いのはその名残であろう¹⁴⁾。

Halpern によれば、16 世紀初頭からグラマースクールは増加傾向にあったが、これを後押ししたのが人文主義者たちによる教育改革と、宗教改革である¹⁵⁾。1510 年、セントポール大聖堂の首席司祭だった John Colet は St Paul’s School を設立し、親友であるエラスムスの教育理念に基づくカリキュラムを導入した。エラスムスは古典という「真実の知識」に近づくための要件として「言葉の知識」である古典語教育を重視したが、それまで主流だった文法の機械的暗記を否定し、優れたラテン語話者との交流

12) Peter Gordon and Denis Lawton, *Dictionary of British Education* (London: Woburn Press, 2003), p. 109.

13) ‘grammar school, n.’, in *Oxford English Dictionary* <<https://www.oed.com/view/Entry/80580?redirectedFrom=grammar+school>> [accessed 16 August 2023]; ‘History’, The King’s School Canterbury <<https://www.kings-school.co.uk/about/history/>> [accessed 16 August 2023].

14) Foster Watson, *The English Grammar Schools to 1660: Their Curriculum and Practice* (Cambridge: Cambridge University Press, 1908), pp. 10–15; Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, pp. 442–43.

15) Halpern, p. 274.

や一流作家を豊富に読むことを推奨した。二人が策定した St Paul's のカリキュラムはその後のグラマースクールの規範となる¹⁶⁾。また宗教改革以降、王室も学校教育への介入を強めていく。1540年代後半に寄進礼拝堂解散令 (the Chantry Act) が公布されると、最も数の多かった寄進礼拝堂付属学校も点検対象となり、多くは王室による再認可を経て運営を続けた¹⁷⁾。王室認定教科書も登場し、中でも St Paul's の主幹教諭だった William Lily のラテン語文法書、*A Shorte Introduction of Grammar* (1548) と *Breuiissima institutio* (1549) はあまねく使用され、Lily's Grammar や *The Royal Grammar* の名称で知られた¹⁸⁾。1545年にヘンリー八世が出版した小祈祷書 (*The King's Primer*) もテキストに指定されている¹⁹⁾。このようにグラマースクールは小祈祷書の文言通り、「神、君主、臣民への義務を学ぶよう若者を育成する」機関として発展したのである²⁰⁾。

人文主義者と王室に加え、商人もグラマースクールの発展に大きく貢献した²¹⁾。中世にもギルドが学校教育を支援した例は少なくなく、シェイクスピアの母校とされる King Edward IV School, Stratford-upon-Avon も

-
- 16) Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, Chapter 9; J. B. Trapp, 'Colet, John (1467–1519), Dean of St Paul's and Founder of St Paul's School', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-5898>> [accessed 18 August 2023].
 - 17) Watson, pp. 12–13; Kenneth Charlton, *Education in Renaissance England* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965), pp. 91–92.
 - 18) Charlton, p. 108; R. D. Smith and Hedwig Gwosdek, 'Lily, William (1468?–1522/1523), grammarian and schoolmaster', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-16665>> [accessed 18 August 2023].
 - 19) 'Henry VIII: May 1545, 6–10', in *Letters and Papers, Foreign and Domestic, Henry VIII, Volume 20 Part 1, January–July 1545*, ed. by James Gairdner and R. H. Brodie (London: His Majesty's Stationery Office, 1905), pp. 343–364. *British History Online* <<http://www.british-history.ac.uk/letters-papers-hen8/vol20/no1/pp343-364>> [accessed 19 August 2023].
 - 20) Qtd. in Halpern, p. 22.
 - 21) Watson, pp. 21–23; Charlton, pp. 92–93.

13世紀に聖十字架組合（the Guild of the Holy Cross）によって設立されたが²²⁾、こうしたギルドの大半は教会関係で、礼拝堂や病院の設立を手がけていた²³⁾。一方、宗教改革後にグラマースクール教育に携わった商人やギルドは世俗的で、教育への期待も実利的であった。通商を支える会計や測量には識字と算術が不可欠であったし、支配階級の言語であり西洋の共通語でもあるラテン語を学ぶことは中産階級の子弟にとっても有利と考えられたのである²⁴⁾。実際、教会の付属校である St Paul's を設立したのも織物商組合（the Mercers' Company）であり、Colet 自身も組合員であった²⁵⁾。Edmund Spenser、Thomas Kyd、John Webster など多くの作家を輩出した Merchant Taylors' School も仕立屋組合（the Merchant Taylors' Company）が設立している²⁶⁾。

劇場関係でいえば、海軍大臣一座の看板役者 Edward Alleyn が設立した the College of God's Gift at Dulwich（通称 Dulwich College）もその一例である。1619年9月13日の開校宣言によれば、この施設は「貧しい男性、女性、子供の救援、維持、扶養」を目的とし、中でも「子供たちが〔さまざまな〕能力を身につけ、十分な力と自由を得るための指導」を行うとしている。実際、子供たちは「12名の貧しい生徒」（'twelve poore Schollers'）と呼ばれ、大学進学も視野に入れた高度な教育を受けていた²⁷⁾。Alleyn が亡くなる2か月前の1626年9月29日にまとめた学則に

22) 'History of the School', King Edward VI School <<https://www.kes.net/about-us/history-of-the-school/>> [accessed 19 August 2023].

23) 'The Guild Buildings of Shakespeare's Stratford-upon-Avon', Internet Archaeology (University of York) <<https://intarch.ac.uk/journal/issue44/6/4-2.html>> [accessed 19 August 2023].

24) Halpern, p. 23.

25) Charlton, pp. 92-93; Trapp.

26) 'Old Boys', Merchant Taylors' School <<https://www.mtsn.org.uk/life-at-taylors/about/old-boys>> [accessed 19 August 2023]; Joan Simon, *Education and Society in Tudor England* (Cambridge: Cambridge University Press, 1967), p. 306.

27) William Young, *The History of Dulwich College* (London: Morrison & Gibb, 1889), vol. 1, pp. 45-49 (p. 46).

は次の文言がある。

80. Item, I ordaine that the said twelve poore schollers, and ev[er]y of them for the time being, as he shall attaine to the age of eighteene yeares, shall then bee sent out of the said college and preferred to the universitie, or some trade or manual occupac[i]on, as his capacity shalbe fitt, at the chardge of y^e college[.]²⁸⁾

実際、どれくらいの生徒が Alleyn の望み通り、大学に進学したのかは不明である。1658 年には 1 名の少年が大学に通うための雑費が計上されているが、学位は取得しなかった²⁹⁾。とはいえこのことは、Alleyn の施設でグラマースクールと同等の古典教育が行われたことを示しており、シェイクスピアと同じ中産階級の俳優が学校教育に強い関心を寄せていたことの証左となるだろう。

3. 少年俳優による通学の実績

ではこうしたグラマースクールにどれくらいの少年俳優が通ったといえるのだろうか。これを知ることは極めて困難だが、ここでは当時の学校数や生徒の身分構成、宮内大臣一座／国王一座の少年俳優の経歴からわかることを述べていく。まず学校数であるが、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけてグラマースクールが急増し、大学や法学院に進学する生徒も増えたことはよく知られており、Lawrence Stone はこれを ‘educational revolution’ と呼んだという³⁰⁾。1587 年に William Harrison は ‘The Description of England’ (Raphael Holinshed 編著 *Chronicles* 所収) においてグラマー

28) Young, vol. 1, pp. 65–100 (p. 80).

29) Young, vol. 1, p. 142.

30) David Cressy, ‘Educational Opportunity in Tudor and Stuart England’, *History of Education Quarterly*, 16.3 (1976), 301–20 (p. 302).

スクールが一枚もない自治都市は多くないと述べている。

Besides these universities also there are great number of grammar schools throughout the realm, and those very liberally endowed, for the better relief of poor scholars, so that there are not many corporate towns now under the Queen's dominion that hath not one grammar school at the least, with a sufficient living for a master and usher appointed to the same.³¹⁾

また1676年にはEdward Chamberlaineがほぼすべての市場町に無償のグラマースクールがあると記している：「[T]here are of late *Grammar Schools*, Founded and Endowed, in almost every Market Town of *England*, wherein the Children of the Town, are onely to be taught *gratis*, without any other Allowance³²⁾。一方、A. Monroe Stoweは国王勅許や寄付金の記録から確認できるエリザベス一世時代の学校数は343校としており、これは1601年の推定人口が411万人、5～14歳の割合が20.5%という統計をふまえるとかなり少ない数字である³³⁾。

いずれの資料も当時の学校数を知る上で決定的とはいえないが、重要なのは学校に通える距離にあっても親の意向や経済的事情で通学を断念する子供が多かったという点である。誰が「教育革命」の恩恵を受けたかについてはさまざまな議論があるが、David Cressy、Rosemary O'Day、Halpern

31) William Harrison, *The Description of England: The Classic Contemporary Account of Tudor Social Life*, ed. by Georges Edelen (New York: Dover Publications, 1994), p. 176.

32) Edward Chamberlaine, *Angliæ notitia: or, The Present State of England* (London, 1676), Part 2, p. 282.

33) A. Monroe Stowe, *English Grammar Schools in the Reign of Queen Elizabeth* (New York: Teachers College, Columbia University, 1908), pp. 11, 157-50; E. A. Wrigley and R. S. Schofield, *The Population History of England 1541-1871: A Reconstruction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), pp. 208-9, 216.

はジェントリーと中産階級が恩恵を受ける一方、貧困層は取り残されたという慎重な見方を示している³⁴⁾。たとえば O'Day はヨーマンの息子の回顧録を引き、農業従事者の子供が繁忙期に学校を休まざるをえず学業に支障が出たことを示している³⁵⁾。また Cressy によれば、チューダー朝には Free Grammar School が各地に作られたが、'free' といっても一部の生徒の授業料が免除されるだけで、それ以外の費用は支払う必要があり、授業料免除も貧困層が対象とは限らなかった³⁶⁾。実際、いくつかの学校の生徒の身分構成をみると、教育機会の拡大が貧困層にも及んだという見方は楽観的すぎるのがわかる。たとえば Colchester Free Grammar School は O'Day 曰く「平均的な市場町の典型的な学校」だが、1637 年から 1645 年に在籍した 165 名の生徒の身分構成は、貴族・ジェントリー 31%、聖職者などの専門家 20%、商人 37%、ヨーマン 12%、小作農 0%、労働者 0% である³⁷⁾。Halpern が述べるように、「グラマースクールと大学は概ねジェントリー、商人、専門職の領分で、貧しい生徒は英語の読み書きと簡単な算術を教える付属校に通う」のが精一杯だったのである³⁸⁾。

演劇界に目を向けると、劇作家のほとんどはグラマースクールや大学、法学院への進学が確認できるのに対し³⁹⁾、役者については最も研究がさか

34) Cressy, pp. 301-3; Rosemary O'Day, *Education and Society 1500-1800* (London: Longman, 1982), pp. 31-38; Halpern, pp. 24-25.

35) O'Day, pp. 3-4; William Stout, *The Autobiography of William Stout of Lancaster, 1665-1752*, ed. by J. D. Marshall (New York: Manchester University Press, 1967), p. 70.

36) Cressy, pp. 307-9.

37) Cressy, pp. 310-11; O'Day, p. 37.

38) Halpern, pp. 24-25.

39) *Oxford Dictionary of National Biography* で主要な作家を調べると、グラマースクールに通った記録や形跡があるのは Shakespeare (King Edward IV School, Stratford-upon-Avon)、Christopher Marlowe (King's School, Canterbury)、Ben Jonson (Westminster School)、Thomas Kyd (Merchant Taylors' School)、John Webster (Merchant Taylors' School)、George Peele (Christ's Hospital)、Thomas Dekker である。Dekker については John Twynning がこう述べている: 'There is no evidence regarding Dekker's education [...] However, his writing strongly suggests that he had a grammar school education'. 大学や法学

んな宮内大臣一座／国王一座でさえも情報が少ない。たとえば同劇団の看板役者の Richard Burbage は父親の John がシアター座を完成させた8歳の頃にはロンドンに住み、16歳で初舞台をふんでいるので、グラマースクールに通っていた可能性が高いが、記録は確認されていない⁴⁰⁾。こうした限られた情報の中から少なくともいえるのは、成人俳優の中には名門のグラマースクール出身者もいたこと、少年俳優の大半は中産階級であったことの2点である。

まず成人俳優から見ていくと、唯一記録が残っているのは William Ecclestone と Nathan Field である。Ecclestone は父親のギルドが経営する Merchant Taylors' School に 1599 年から 1604 年までの 6 年間通っていた。Merchant Taylors' は先述の通り Kyd や Webster といった劇作家を輩出した名門校であり、特に初代校長 Richard Mulcaster の時代は演劇活動がさかんで、毎年のように宮廷上演を行っていた。Ecclestone の在籍時に Mulcaster はすでに退職していたが、後任の William Hayne も演劇の伝統を継承し、Ecclestone を指導した可能性があるという⁴¹⁾。一方、Field は St Paul's の生徒だったが、13歳の時にチャペル・ロイヤル子供

院に進学していることからグラマースクール（もしくはそれと同等）の古典教育を受けていたことがわかるのが、Francis Beaumont、John Fletcher、Thomas Middleton、James Shirley、Philip Massinger、Robert Greene、Thomas Heywood、John Ford である。いずれの言及もないのは、George Chapman と Richard Brome のみである。John Twynning, 'Dekker, Thomas (c. 1572-1632), playwright and pamphleteer', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-7428>> [accessed 20 August 2023].

40) Mary Edmond, 'Burbage [Burbadge], Richard (1568-1619), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3951>> [accessed 20 August 2023].

41) Astington, p. 42; Eva Griffith, 'Ecclestone, William (d. c. 1624), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-8441>> [accessed 21 August 2023].

劇団に強制徴用されたのち、国王一座に入団している。1601年に起きた悪名高い Thomas Clifton 誘拐事件が示す通り、子供劇団の経営者はしばしばグラマースクールの帰り道を狙い、子供を強制徴用したのである。このことは Field と同じ子供劇団から国王一座に移った William Ostler と John Underwood も名門校の出身だった可能性を示唆する⁴²⁾。

次に少年俳優について Andrew Gurr と Kathman の研究を照合すると、1594年から1642年までに宮内大臣一座／国王一座に在籍したことがわかっている少年俳優の数は31名である⁴³⁾。このうち Nicholas Crosse と Richard Robinson も子供劇団出身という説を信じるのであれば、彼らも名門校で教育を受けた可能性が高い⁴⁴⁾。あとは出身階級から察するのみだが、父親の職業や身分がわかる9名については、俳優が4名 (Alexander Gough, Robert Pallant, William Patricke, John Thompson)、仕立屋が1名 (William Ecclestone)、市の楽隊員が1名 (Thomas Belte)、織物工

42) Lucy Munro, *Children of the Queen's Revels: A Jacobean Theatre Repertory* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), pp. 37-38; Frederick Gard Fleay, *A Chronicle History of the London Stage, 1559-1642* (London: Reeves and Turner, 1890), pp. 127-132 (p. 129).

43) Andrew Gurr, *The Shakespeare Company, 1594-1642* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), pp. 217-46; Kathman, 'How Old', 'Grocers', 'John Rice'. Belsey も少なくとも30名の少年俳優が在籍したと述べている (p. 54)。なお31名という数字は、*The Seven Deadly Sins*, Part 2 を上演したのが宮内大臣一座であるという Kathman の議論を受け入れた場合の数字である。David Kathman, 'Reconsidering *The Seven Deadly Sins*', *Early Theatre*, 7.1 (2004), 13-44.

44) Crosse については Kathman と Nungezer 参照。ただし Crosse は1614年5月25日に John Heminges と10年間の年季奉公契約を交わしており、1607年にセントポール子供劇団の劇団員だったという説はやや厳しいようにもみえる。Robinson については Lucy Munro がチャペル・ロイヤル子供劇団出身という説を唱えている。Kathman, 'Grocer', p. 9; Edwin Nungazer, *A Dictionary of Actors and of Other Persons Associated with the Public Representation of Plays in England before 1642* (New Haven: Yale University Press, 1929), p. 108; Lucy Munro, 'Robinson, Richard (c. 1595-1648), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-75572>> [accessed 21 August 2023].

が1名 (Charles Hart)、革製品の貿易商が1名 (Nicholas Tooley)、紳士が1名 (Stephen Hammerton) となっている。うち2名を含む16名にはギルドの徒弟記録があるため、31名のうち少なくとも23名は中産階級以上、すなわちグラマースクールに通えた層であったことがわかる⁴⁵⁾。

4. 少年俳優が学んだ演劇的技術

ではグラマースクールで少年俳優たちは何を学び、どのようなスキルを習得したのか。カリキュラムや教授法には地域や学校によって違いもあったはずだが、16世紀半ば以降、教師が執筆した指導用教本が多く出版されており、こうした本がLily's Grammarなどの王室認定教科書と並んで普及していたことは、当時の平均的な学校教育を素描することがある程度可能であることを示している。中でも20年間、プリマスで教鞭をとったWilliam Kempeの*The Education of Children* (1588) は、Roger Aschamなどグラマースクールの礎となった教育論者の議論をまとめた有益な文献である。Kempeは初等中等教育を付属校と職業訓練を含めた4段階(degrees)に分けており、グラマースクールは第2段階(下級)と第3段階(上級)にあたるが、下級では「文法と他言語の知識」、上級では「論理学、雄弁術、より完璧な文法」を学ぶと記している⁴⁶⁾。ただしグラマースクールの目的はあくまでラテン語を話す・書く力の習得であり、論理学

45) John Hemingesの徒弟として記録があるのは、Thomas Belte、George Burgh、Alexander Cooke、Nicholas Crosse、Thomas Holcombe、Robert Pallant、William Patricke、Richard Sharpe、William Trigg、John Wilsonの10名である。その他、Robert Arminの徒弟が1名 (James Jones)、Alexander Cookeの徒弟が1名 (Walter Haynes)、John Lowinの徒弟が3名 (Michael Bedell、Thomas Jeffrey、George Vernon)、Ambrose Beelandの徒弟が1名 (Nicholas Underhill) がいる (Kathman, 'Grocers', pp. 47-49)。また遺言書などからAugustine Phillips、Thomas Pope、Richard Burbage、John Shankの徒弟として推定される者が最大11名いるが、ここには含んでいない。

46) William Kempe, *The Education of Children in Learning* (London, 1588), sigs. F3^v, G2^v. 下級 ('the lower division')、上級 ('the upper division') は Baldwin による言い換えだが、後年の批評家にも踏襲されているためここでも使用する。Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, p. 76.

はかいつまむ程度であったという⁴⁷⁾。

こうしたカリキュラムを通じて Kempe が最も重視するのが模倣 (imitatio) である。

[A]ll knowledge is taught generally both by precepts of arte, and also by practise of the same precepts. [...] Wherefore first the scholler shall learne the precepts : secondly, he shall learne to note the examples of the precepts in unfoulding other mens workes : thirdly, to imitate the examples in some worke of his owne : fourthly and lastly, to make somewhat alone without an example.⁴⁸⁾

生徒はまずルールを覚え、他人の仕事を実例として模倣し、最後は自ら創造するよう求められる。Baldwin によれば、模倣の概念はラテン語最古の雄弁術の書 *Ad Herennium* にすでに見られ、人文主義者たちにも支持された⁴⁹⁾。たとえば Ascham は *The Scholemaster* (1570) において「語学力と雄弁さの向上」に役立つ6つの学習法を検証し、'Imitatio' (模倣) と 'double translation' (二重翻訳) が最も有益だと論じている。Ascham によれば、模倣とは「自分が従おうとする例を生き生きと完璧に表現する能力」('a facultie to expresse liuelie and perfitelie that example : which ye go about to folow') であり、二重翻訳はある言語を別の言語に翻訳し、元の言語に翻訳し直す学習法だが、彼が提唱するラテン語学習法はこの2つを掛け合わせたものになっている⁵⁰⁾。まず教師は文章 (たとえばキケローの『書簡集』) の内容を生き生きとわかりやすく説明し、英訳と文法解説を行う。次に何名かの生徒が教師を模倣して、英訳と文法解説を行う。そ

47) Kempe, sigs. C2^v-C3^r; Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, p. 440; Watson, p. 86.

48) Kempe, sig. F2^r.

49) Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, pp. 438-40.

50) Roger Ascham, *The Scholemaster* (London, 1570), sigs. 45^v, 33^v-35^v.

の後、生徒たちは英訳をラテン語に戻し、教師はそれを本文と比較しながら指導する。生徒がキケローと同じ語句や語順を選んだ場合は褒め、異なる場合はキケローならどうしたかを解説するのである⁵¹⁾。Enterline が述べる通り、生徒は英訳や文法解説を復唱することで、いわば教師役を演じ、教師自身もキケローになりきって指導することが求められる⁵²⁾。このように、グラマースクールにおける模倣はさまざまな形で演劇性と結びついたが、ここでは最も狭い意味での演技、中でも女性の演技と関わりがあるスピーキングとライティングについて考察していく。

Foster Weston によれば、「中世・ルネサンスの教養人にとってラテン語はまず何よりも話し言葉」であり、どうすれば子供が正しいラテン語を話す力を習得できるのかさまざまな議論があった。一番の理想は6歳までフランス語を話すことを禁じられたモンテーニュのように、家庭でも学校でも洗練されたラテン語のみを使用することであり、実際多くのグラマースクールでは英語を話した生徒に対する罰則があった⁵³⁾。しかし『ウィンザーの陽気な女房たち』におけるヒュー・エヴァンズの諷刺にみられるように、学校教師が話すラテン語もしばしば不正確であることは Ascham から教育論者にとって悩みの種であった。さいわいルネサンス期には多くの古典が発掘され、これらの朗誦を通じてスピーキング力を養うことが推奨された⁵⁴⁾。多くのグラマースクールの生徒はまず日常会話などの対話集 (colloquia) を学び、戯曲の朗誦や上演を経て、最終目標である演説 (declamation) へと進んだが、学校教育における戯曲の活用は少なくとも16世紀初頭から確認できる⁵⁵⁾。たとえば1528年には Thomas Wolsey が母校 Ipswich School の学則において、テレンティウスの教授法を詳しく述べている。

51) Ascham, sigs. 1^v-2^r.

52) Enterline, pp. 12-13.

53) Watson, pp. 305-16 (p. 305).

54) Watson, pp. 307-8, 325-26.

55) Enterline, pp. 17-18.

Wolsey suggests the teacher may briefly but perspicuously unravel the substance of the plot ; and carefully point out the particular kind of verse. 'Anything proper or improper for imitation should be scrupulously noticed to the young party. Moreover you will pay attention that in play-time the party speak with all possible correctness ; sometimes commending the speaker when a phrase is rather apposite, or improving his expression when erroneous'.⁵⁶⁾

ここで Wolsey は演劇の時間 ('play-time') にふれているが、'play days' もよくみられる文言である。たとえばグローブ座の近隣で、多くの役者が居を構えた St Saviour's のグラマースクールの学則にはこう記されている : 'On play days the highest Form shall declaim and some of the inferior Forms act a scene of Terence or some dialogue'⁵⁷⁾。このようにグラマースクールではしばしば学校上演のための時間が設けられていたわけだが、少年俳優や役者の子供はこうした学校上演でも活躍したかもしれない⁵⁸⁾。

一方、Wolsey は模倣に不適切な内容にもふれており、Ascham も次のように述べている。

Here is base stuffe for that scholer, that should be cum hereafter, either a good minister in Religion, or a Ciuill Ientleman in seruice of his Prince and contrie [.]

Of this short tyme of any purenesse of the Latin tong, for the first for-

56) Watson, p. 315.

57) Qtd. by Watson, p. 315.

58) St Saviour's School 設立の経緯は Simon, p. 313 に詳しい。なお徒弟が通学しながら職業訓練を受けることは珍しくなかった。Ilana Krausman Ben-Amos, *Adolescence and Youth in Early Modern England* (New Haven : Yale University Press, 1994), p. 112.

ties yeare of it, and all the tyme before, we haue no peece of learning left, saue *Plautus* and *Terence*, with a litle rude vnperfit pamphlet of the elder *Cato*.⁵⁹⁾

プラウトゥスやテレンティウスの喜劇は「卑俗なもの」(‘base stuffe’)であり、国家に奉仕する善良な聖職者や気品ある紳士を目指す生徒には不適切だが、純粋なラテン語が話された時期は短く、文献が少ないため読まざるをえないという趣旨である。要するに戯曲、特に喜劇が教材に選ばれたのは消極的な理由からだったかもしれないが、演劇は紳士教育の要である雄弁術と結びつき、少年俳優にさまざまな教養を与えることになる。

雄弁術は文法と並ぶグラマースクール教育の柱であり、Richard Sherryの *A Treatise of Schemes and Tropes* (1550)、Charles Butlerの *Rhetoricæ libri duo* (1600) など多くの教科書がある⁶⁰⁾。中でも Reinhard Lorichが編纂した Aphthoniusの *Progymnasmata* (Marburg, 1542) は人気で、Richard Rainoldeによる英語版 (1563) も出版されている⁶¹⁾。当時も弁論術は、発想 (inventio)、配列 (dispositio)、修辞 (elocutio)、記憶 (memoria)、発表 (pronuntiatio / actio) の五分野から成り、このうちグラマースクールで重視されたのは修辞と発表である⁶²⁾。たとえばある生徒の手記にはこう記されている。「弁論術はスピーチを転義 (trope) と転形 (figure) で飾ること [すなわち修辞] と、それらの異なる性質に合わせて発表することから構成される」⁶³⁾。このうち演技と直接関わりがあるのは発表であり、

59) Ascham, sigs. 59^r, 58^v.

60) 当時のグラマースクールで使用された雄弁術の教科書については Watson, pp. 447-452、文学テキストは Baldwin, *Small Latine*, vol. 1, p. 436 が詳しい。

61) Brian Vickers, ‘Some Reflections on the Rhetoric Textbook’, in *Renaissance Rhetoric*, ed. by Peter Mack (New York: St. Martin’s Press, 1994), pp. 81-102 (pp. 88-89); Francis R. Johnson, ‘Two Renaissance Textbooks of Rhetoric: Aphthonius’ “Progymnasmata” and Rainolde’s “A Booke Called the Foundation of Rhetorike”’, *Huntington Library Quarterly*, 6.4 (1943), 427-44.

62) 訳語は梅田倍男『シェイクスピアのレトリック』英宝社、2005年、13頁参照。

発表を構成する口跡 (pronuntiatio) と身振り (actio) がどちらもスピーキングの訓練で重視されたことは 1640 年頃にロザラムで教師を務めた Charles Hoole の言葉から窺える⁶⁴⁾。 *A New Discovery of the Old Art of Teaching Schoole* (1661) からの引用である。

When you meet with an Act or Scene that is full of affection, and action, you may cause some of your Scholars, after they have learned it to act it, first in private amongst themselves, and afterwards in the open Schoole before their fellows ; and herein you must have a main care of their pronounciation, and acting every gesture to the very life. This acting of a piece of a Comedy, or a Colloquy sometimes, will be an excellent means to prepare them to pronounce Orations with a Grace [.]

感情と動作に満ちた幕場は生徒が学んだ後に演じさせると良く、教師は生徒の口跡 (‘pronunciation’) とすべての身振り (‘gesture’) が本物らしく演じられているか注意する必要がある。また Hoole は「喜劇作品や対話集を演じることは、生徒に演説を立派にやり遂げる準備をさせる格好の手段」であると強調している⁶⁵⁾。

実際どのような言い回しや身振りが伝授されたのかは、Charles Butler の教科書と、John Brinsley の指導用教本 *Ludus literarius* (1612) から知ることができる。Kempe や Hoole と同じく二人も教師であり、彼らの著作には現場の経験が反映されている⁶⁶⁾。まず Butler は、口跡と身振りはそ

63) Enterline, p. 38.

64) W. R. Meyer, ‘Hoole, Charles (1610-1667), schoolmaster and author’, *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-13701>> [accessed 9 February 2023].

65) Charles Hoole, *A New Discovery of the Old Art of Teaching Schoole, in Four Small Treatises* (London, 1661), pp. 142-43.

れぞれ聴衆の耳と目に訴えるとした上で⁶⁷⁾、特定の感情や状況に合う声の特徴を挙げている。たとえば憐れみの声はしなやかで感情に満ち、途切れがちで、涙をたたえるが、喜びの声は柔らかくゆったりとした朗らかな声である。あるいは嘆願する際はなめらかで従順な声が良いという。

In miseratione vox erit flexibilis, plena, interrupta, flebilis [...] In iracundia vox co[n]traria est, acuta, incitata, crebro incidens. [...] In metu & verecundia contractus & hæsitans sonus est. In voluptate, tenerum, lene, effusum, hilaratum vocis genus optatur [...] In blandiando, satisfaciendo, rogando, levis vox & summissa est.⁶⁸⁾

一方、身振りは「無知な者、大衆、さらには野蛮人」の魂をも揺さぶる人類の共通語であり、たとえば『アエネーイス』第一巻でデイドーがアイネイアース一行との面会で顔を伏せたのは、彼らを警戒したことへの「女王の羞恥心」、「謙遜と慎ましさ」の表われである⁶⁹⁾。

興味深いことに、Butler は本書の 9 割を修辞に充てており、発表はあまり論じられていない。同じ傾向は Sherry や Rainolde の教科書にもみられるが、これは発表が軽視されたためではなく、教師が生徒に実演で教えたことの表われであろう。同じように、少年俳優も成人俳優から口跡と身振りを中心に実演指導を受けていた。1607 年 7 月 16 日に国王一座の少年俳優 John Rice は織物商組合の祝典で、ヘンリー王子に向けてスピーチを披露したが、同組合は Rice の「指導」の名目で、成人俳優の John

66) Simon, p. 320 ; John Morgan, 'Brinsley, John (bap. 1566, d. in or after 1624), schoolmaster and writer on education', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3440>> [accessed 9 February 2023].

67) Charles Butler, *Rhetoricæ libri duo* (Oxford, 1598), sig. F4^r.

68) Butler, sigs. F6^v-F7^v.

69) Butler, sigs. F7^v-F8^r, G1^r.

Heminges に 40 シリングを支払っている：‘To M^r Hemmyngs for his direccion of his boy that made the speech to his Maiestie 40^s, and 5^s given to John Rise the speaker’⁷⁰⁾。Heminges が行った指導の詳細は不明だが、‘A very proper Child, well spoken, being clothed like an angell of gladness with a Taper of Ffrankincense burning in his hand’ という賞賛の言葉からは、口跡と身振りに関する指導が行われたことが想像できる⁷¹⁾。

一方、Brinsley は口跡のみを論じているが、最も重要なのは次の点である。

To pronounce euery matter according to the nature of it, so much as you can ; chiefly where persons or other things are fained to speake. As for example : In the *Confabulatiunculae pueriles*, Cause them to vtter euery dialogue liuely, as if they themselues were the persons which did speake in that dialogue, & so in euery other speech, to imagine themselues to haue occasion to vtter the very same things [...] whose speech soeuer else, which they are to imitate. Of which sort are the Prosopopeyes of Iupiter, Apollo, and others in Ouids Metamorphosis, Iuno, Neptune, AEolus, AEneas, Venus, Dido, &c. Virgils AEneids.⁷²⁾

プロソポポエエア（活喩法）とは「口を利かないもの、身体をもたないもの、あるいは死者に、人や動物としての性格、意思の伝達手段、心情があると装う」修辞技法で、いわゆる擬人法も含まれる⁷³⁾。Brinsley は作家が

70) Qtd. in E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 2 (Oxford : Clarendon Press, 1923), p. 213.

71) Qtd. in T. W. Baldwin, *The Organization and Personnel of the Shakespearean Company* (Princeton : Princeton University Press, 1927), pp. 422–23.

72) John Brinsley, *Ludus literarius* (London, 1612), pp. 212–13. My emphasis.

73) Richard Sherry, *A Treatise of Schemes and Tropes* (London, 1550), sig. E2^f.

その筆で架空の人物に命を吹き込んだと述べており、生徒にもその言葉や心情を演じさせることで、活喩法を実践させるのである。自分自身がその言葉を語る状況にあると想像する訓練は現代のスタニスラフスキー・システムとも共鳴するが、これが重視されたのはむしろ演技のためではなく、弁護士として誰かを代弁したり、聖職者として生き生きと物語ることで聴衆の心を動かすためであった。要するに、こうした発表の技法は国の要職を担う者に欠かせない教養だったが、いわばその副産物として、優れた演技の素養を持つ少年俳優を生み出したと考えられるのである。

実際 Brinsley が朗読を勧める神話の人物にユノー、ウェヌス、デイドーなど、多くの女性が挙げられているのは重要である。Rainolde も活喩法の例として Lorich が執筆したヘカベの独白を挙げており、女性としての語りが一般的なスピーキング訓練だったことを示している⁷⁴⁾。女性の代弁はライティングでも行われた。Rutter が依拠する Woods の研究によれば、中世前期には古典の登場人物の心情を表わす作文があり、女性も対象とされた。女性はしばしば激情と結びつけられ、反復などの修辞技法の練習に適していたためである。たとえばアウグスティヌスは『アエネーイス』のユノーの心情を表わす課題が学校であり、「人物の品位にふさわしく、怒りや悲しみの感情を、できるだけふさわしく浮きあがらせ、自分の考えを適切に表現する」ほど賞賛されたと回顧している⁷⁵⁾。一方、ルネサンスのイングランドには書簡文の練習があった。スピーキングがおおむね対話集、演劇、演説の順で訓練されたように、ライティングでも文法と構文を学んだあと書簡などを執筆し、小論文 (thesis) に進んだが、書簡には定型文や様式がある一方、想像力も求められた。このことは 1560 年代の Rivington Grammar School の学則からうかがえる。

74) Enterline, p. 127; Richard Rainolde, *A Booke Called the Foundacion of Rhetorique* (London, 1563), sigs. N2^v-N3^r.

75) Woods, pp. 284-86; 聖アウグスティヌス『告白』上巻、服部英次郎訳、岩波文庫、1976年、37頁。

And the elder sort must be exercised in devising and writing sundry epistles to sundry persons, of sundry matters, as of chiding, exhorting, comforting, counselling, praying, lamenting, some to friends, some to foes, some to strangers ; of weighty matters, or merry, as shooting, hunting, &c., of adversity, or prosperity, of war, and peace, divine and profane, of all sciences, and occupations, some long and some short [.]⁷⁶⁾

さまざまな内容や目的の書簡を異なる人物に宛てて書く中で、生徒は多様なペルソナを装う必要があった。Watson によれば、スピーキングと同じくライティングでも最も重宝された教材はキケローとテレンティウスであり、特に『書簡集』は人気だったが、オウィディウスの『ヘーローイデス』もよく模倣されたという。『ヘーローイデス』は 1528 年頃の Eton College の 5 年生の教科書に指定されており、有名な参考書である *Illustrium poetarum flores* (1598) にも引用されている⁷⁷⁾。『ヘーローイデス』は「神話の登場人物が思いを寄せる相手に宛てて記した書簡という体裁」をとり、差出人の大半が女性であるという特徴をもつが、生徒はこうした架空の女性たちの声を朗読し、彼女たちになりきって手紙を書いたと考えられるのである⁷⁸⁾。これは女性を演じる上で少年俳優にとって有益な訓練だったに違いない。

グラマースクールの生徒がオールメールの空間で、理想的な男子を育成する紳士教育を受けながら、女性を代弁したり演じたりしたのは一見奇妙にもみえる。Walter J. Ong がグラマースクールを、家庭という私的な女性空間から、公的な男性空間に少年を送り出すための ‘male puberty

76) Qtd. by Watson, p. 420.

77) Bate, pp. 21-22 ; Baldwin, *Small Latine*, vol. 2, p. 419 ; Watson, p. 486 ; Anon., *Illustrium poetarum flores* (London, 1598), pp. 62-63.

78) オウィディウス『ヘーローイデス：女性たちのギリシア神話』高橋宏幸訳、平凡社、2020 年、352-53 頁。

rites' と呼んだことは有名である⁷⁹⁾。実際、生徒は母語である英語の使用を禁止され、ローマの父たちのラテン語を習得し、「乳母や女中が教えるおろかで卑俗なバラッドや、老婆の屑同然のおとぎ話」を棄て、男性偉人の仕事を読むよう指導された⁸⁰⁾。Enterline が述べるように、グラマースクールには支配する性としての男性を育て、伝統的なジェンダー規範を強化する役割があったのである⁸¹⁾。むろん演劇もこれに寄与するものとみなされた。演劇は国の要職に欠かせない雄弁術の実践であると同時に、男子の身体と精神を鍛える手段でもあったのである。このことは Merchant Taylors' School の初代校長で、多くの宮廷上演を手がけた Richard Mulcaster の教育論 *Positions* (1581) にうかがえる。Mulcaster は当時の教育論者としては珍しく、ラテン語教育ではなく身体訓練に注目し、競争、水泳、剣術などを論じているが、演劇的な技術にも言及している。たとえば大声でスピーチを読みながら低音と高音を行き来する発声練習 ('Of lowd speaking') は、体幹、喉、肺など「発声とスピーチを支えるさまざまな器官」を鍛えるだけでなく、幅広い声量や高さの声を出すのに役立つし、息を止める練習 ('Of holding the breath') は死体となってベッドに横たわるデズデモーナや、彫像のふりをするハーマイオニーのように、息を殺す演技に使えたかもしれない⁸²⁾。こうした訓練の多くは演劇にも役立つ、女性を演じるのにも有益だったかもしれないが、Mulcaster の目的はあくまで雄弁術の向上と、戦場で苦痛に耐えうる男性的身体の形成にあった。彼はこう述べている。

For the vse of warre, and defence, it is more then euident, that exer-

79) Walter J. Ong, 'Latin Language Study as a Renaissance Puberty Rite', *Studies in Philology*, 56.2 (1959), 103-24.

80) Erasmus, qtd. in Halpern, p. 25.

81) Enterline, pp. 15-16.

82) Richard Mulcaster, *Positions* (London, 1581), pp. 55-58, 67-71 (p. 55); McMillin, p. 234.

cise beares the bell : Can one haue a bodie to abide cold, not to melte with heat, not to starue for hunger, not to dye for thirst, not to shrink at any hardnesse, almost beyond nature, and aboue common reache, if he neuer haue it trained?⁸³⁾

Jim Caseyによれば、当時のイングランドは常に戦争状態にあり、こうした身体訓練や痛みを伴うスポーツは少年に規律や競争心、勇猛さを教えるものとして奨励された⁸⁴⁾。演劇にもこうした効果が期待されたことはMulcasterの教え子であるSir James Whitelockeの回顧録に示されている。Whitelocke曰く、Mulcasterは宮廷上演を通じて生徒に「良きふるまいと大胆さ」を教えたという：‘yeerly he presented sum playes to the court, in whiche his scholers wear only actors, and I on among them, and by that meanes taughte them good behaviour and audacity’⁸⁵⁾。Hooleも演劇は「子供特有の卑しい恥じらいや臆病さを追い出す」のに有益だとしている。

This acting of a piece of a Comedy, or a Colloquy sometimes, will be an excellent means to prepare them to pronounce Orations with a Grace, and I have found it an especiall remedy to expell that subrustick bashfulness, and unresistable timorousnesse, which some children are naturally possessed withal, and which is apt in riper yeares to drown many good parts in men of singular endowments.⁸⁶⁾

83) Mulcaster, p. 52.

84) Jim Casey, “Honest payneful pastimes”: Pain, Play, and Pedagogy in Early Modern England’, in *Performing Pedagogy in Early Modern England: Gender, Instruction, and Performance*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson (London: Routledge, 2016), pp. 87–99.

85) Sir James Whitelocke, *Liber famelicus*, ed. by John Bruce (London: Camden Society, 1858), p. 12.

86) Hoole, pp. 142–43.

このように考えると、生徒が女性を巧みに演じることは女性性の表われではなく、むしろ男性にふさわしい雄弁や自信の表われとみなされた可能性もある。Enterline が述べる通り、グラマースクールにおけるジェンダー教育のありようは Org の定式よりもはるかに複雑だったといえるだろう⁸⁷⁾。

5. シェイクスピアによる少年俳優の学びの活用

シェイクスピアは元生徒として、グラマースクール教育が少年俳優に与えたこうしたスキルを把握していたはずであり、彼が「失われた 10 年」に教師をしていたという E. A. J. Honigmann の説を信じるならば、その可能性はさらに高まるが、シェイクスピアはこれらの技術や知識をふまえて少年俳優の役を執筆したのであろうか⁸⁸⁾。先述の通り、Belsey はシェイクスピアが本来不要な場面や役を加えて未熟な少年俳優に場数をふませたと論じているが、グラマースクール関連でいえば『ウィンザーの陽気な女房たち』におけるラテン語練習の場面もこれにあたるかもしれない。少年ウィリアムがグラマースクールの教師ヒュー・エヴァンズからラテン語の手ほどきを受け、ラテン語を解さないクイックリー夫人が的外れな茶々を入れるという短く喜劇的な場面である。

EVANS. Peace your tattlings. – What is ‘fair,’ William?

WILLIAM. *Pulcher.*

QUICKLY. Polecats? There are fairer things than polecats, sure.

EVANS. You are a very simplicity ‘oman. I pray you, peace. –
What is *lapis*, William?

WILLIAM. A stone.

87) Enterline, pp. 17–18.

88) E. A. J. Honigmann, *Shakespeare: the ‘lost years’* (Manchester: Manchester University Press, 1985), p. 24; Astington, p. 39.

[...]

EVANS. That is a good William. What is he, William, that does lend articles?

WILLIAM. Articles are borrowed of the pronoun, and be thus declined : *singulariter nominativo, hic, haec, hoc.* (F : 4.1.21-27, 32-35)⁸⁹⁾

クイックリー夫人がラテン語の語彙や文法用語に卑猥な意味を読み込むさまは、主人公のフォルスタッフが人妻の態度を性的な誘いとして誤読するというテーマと響き合うが、この場面自体はプロットから独立しており、ウィリアム少年が登場するのもここだけである。ウィリアムはエヴァンズの「fair はラテン語で何か」、「*lapis* は英語で何か」という質問に、‘*Pulcher*’、‘A stone’ と正しく答えるが、Giorgio Melchiori によればこのやりとりは Lily’s Grammar に基づいており、最後の長めの回答も本書からの「ほぼ逐語的な引用」である⁹⁰⁾。要するに、ウィリアム役の少年俳優はセリフを忘れても文法的に正しく答えれば良く、場面をおもしろくする役割はエヴァンズ役の成人俳優とクイックリー夫人役の少年俳優に委ねられているのである。シェイクスピアは『お気に召すまま』の中で、「カタツムリのような重い足取りで嫌々学校に向かう」少年に言及しているが(2.7.145-47)、本作でも退屈な文法授業を思い出しながら、自分と同じ名前の少年を描き、新人の少年俳優に演技させたのかもしれない。グラマースクール教育の記憶が、年の離れた劇作家と新人俳優を結びつけたのであ

89) 以下、特筆しないかぎりシェイクスピア劇からの引用は William Shakespeare, *The Norton Shakespeare*, gen. ed. Stephen Greenblatt, 3rd edn (New York : W. W. Norton, 2016) による。複数の版がある戯曲については議論に応じて、最もシェイクスピアの執筆原稿に近いとされるテキストか、最も上演台本に近いとされるテキストを使用し、幕場行数の前に Q (第 1・四つ折り版)、F (第 1・二つ折版) と記す。

90) William Shakespeare, *The Merry Wives of Windsor*, ed. by Giorgio Melchiori (London : Bloomsbury, 2000), p. 241.

る。むろんウィリアムが一場面しか登場しないことをふまえると、別の役を演じた少年俳優が掛け持ちした可能性もあるが、この場面は1602年出版の第1・四つ折版からは削られており、1623年出版の第1・二つ折版にのみ収録されていることから独立性が高く、新人俳優の有無に応じて挿入可能であることから、Belsey に倣った解釈も捨てがたい⁹¹⁾。

一方、Rutter は古典神話の女性への言及が少年俳優の感情移入を助けたと論じている。『ヴェローナの二紳士』において、ジュリアは小姓に変装して旅に出た恋人を追いかけるが、彼が別の女性に心変わりするのを目撃してしまう。小姓を演じるしかないジュリアはかつて聖霊降臨節の余興の劇でアリアドネーを演じたことがあると述べ、彼女の悲劇を通じて自分の絶望を伝えるのである。先述の『ヘーローイデス』には、アリアドネーがテーセウスに宛てた手紙があり、150行にわたって恋人の裏切りに対する動揺と悲憤、それでも彼を求めてしまう切実さが綴られている。もし少年俳優がグラマースクールでこの手紙を学んでいたとしたら、彼はジュリアの苦悩をよりよく理解できたはずである⁹²⁾。

同じく神話への言及が少年俳優の演技を助けたと思われる例として、『タイタス・アンドロニカス』のタモーラがある。タモーラは森の中でのアーロンとの密会が、ディドーとアイネイアースの卑俗なパロディであることが知られているが⁹³⁾、劇冒頭では男性権力者に息子の命を嘆願する母親として登場し、これは Brinsley が朗誦を勧めている『アエネーイス』第1巻のウェヌスと状況がよく似ている。タモーラが 'Roman brethren! Gracious conqueror, / Victorious Titus, rue the tears I shed -' (Q : 1.1.107-8) と相手を讃え、涙を流してアラーバスの助命を訴えるように、ウェヌスも「涙の浮かんだ目を輝かせながら」、ユピテルを「『人間と神の世を永

91) Melchiori, in Shakespeare, *Merry Wives* pp. 9-10, 35-36.

92) Rutter, pp. 21-24.

93) William Shakespeare, *Titus Andronicus*, ed. by Jonathan Bate (London : Bloomsbury, 1995), p. 169.

遠の支配下に治め、雷光で恐れさせる方よ』』(I. 227-253)と讃え、アイネアースを救うよう求めるのである⁹⁴⁾。タモーラがタイタスの親としての情に訴えかけるのに対し、ウェヌスはユピテルに約束の履行を訴えるなど両者のセリフには違いも多く、一概にシェイクスピアが模倣したとはいえないが、同じく人気の教材だったオウィディウスの『変身物語』に登場するニオベも子供のために嘆願する母親であり、こうした女性像は少年俳優になじみのあるものだったと考えられる。実際、子供を心配する母親の心情は、少年俳優の実体験からも想像しやすかったのではないか。タモーラを演じた少年俳優の演技は当時の観客に強烈な印象を残している。Henry Peachamの有名な上演スケッチでは、主人公のタイタスよりも大きくタモーラが描かれており、手を合わせてひざまずく彼女の姿は、槍をかかげるタイタスと好対照をなしている⁹⁵⁾。もしタモーラ役の少年俳優にウェヌスやニオベのセリフを朗読した経験があったとすれば、そして彼がひざまずく所作の雄弁さを知っていたとすれば、タモーラの嘆願がひときわ観客の目を引いたとしても不思議ではない。

タモーラのように、暴力を阻止するため弁舌をふるう女性はシェイクスピア劇に珍しくないが、その姿にはグラマースクールの生徒の実体験と重なるところがある。当時の学校で鞭打ちが行われていたことは周知の事実だが、生徒はただ苦痛に耐えるのではなく、自分や仲間を守るためしばしば弁舌をふるったのである。中でもミドルテンブル法学院の学生が備忘録に記した次の逸話は有名である。ある日、Richard Mulcasterは生徒を鞭打つ際、自分を司祭、鞭を女性('Lady Burch')に見立て、鞭と生徒のお尻の結婚式を執り行うという即興芝居をしてみせた。Mulcasterは上機嫌で司祭の口上を真似て、二人の結婚('the banes [= banns] of matrimony')に異議のある者はいるかと尋ねたが、一人の善良で勇敢な少年が「異議あ

94) ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001年。

95) Bate, *Shakespeare and Ovid* pp. 39-43.

り」(‘Master, I forbid y^e banes’)と叫んだ。少年は結婚の契りを意味する *banns* を、災いを意味する *banes* に言い換え、この即興芝居の文脈で許される限りの強い口調で鞭打ちに抗議したのである。Mulcasterはこの少年の機知にいたく感心し、二人の生徒は鞭打ちを免れたという⁹⁶⁾。このことは雄弁が、国の要職を担う権力者の属性であると同時に、女性や子供といった社会的弱者が権利を主張するための武器になることも示唆している。

このように Belsey と Rutter の説はさまざまに応用できるが、最後に『リチャード三世』における主人公とアンのダイアログを考察したい。本作の上演年と劇団は議論されているが、Bate は 1594 年に宮内大臣一座が上演した初のシェイクスピア悲劇であると論じており、この見解はアーデン第 3 版の編著者 James R. Siemon によっても支持されている。むろん『ヘンリー六世』第 3 部との連続性を考えればペンブルック伯一座による初演、スタンリー卿の表象をふまえればスタンリー卿／ダービー伯一座による初演という議論が妥当であるが、主人公の独白で幕を開けるシェイクスピア劇は本作だけであり、新しく結成された宮内大臣一座の看板役者であるバーベッジを大々的に売り出す手段だったとも考えられる⁹⁷⁾。だとすれば本作はシェイクスピアが初めて同劇団の座付き作者として、手持ちの少年俳優を意識した作品であったかもしれない。

『リチャード三世』は少年俳優の役が多い作品である。1594 年以前に初演をむかえたシェイクスピア劇において、女性や子供の役は 4 名前後であり、『ヘンリー六世』第 3 部だけは 7 名いるものの、うち 2 名は一場のみの無言役である。一方、『リチャード三世』には 4 名の女性と 5 名の子供が登場し、全員にセリフがある。John Jowett が述べるように、マーガレットとアンを演じる少年俳優が子役を掛け持ちすれば 4 名でも上演可

96) Qtd. in Foster Watson, *Richard Mulcaster and His Elementarie* (London: C. F. Hodgson & Son, 1893), p. 5.

97) Bate, in Shakespeare, *Titus Andronicus* pp. 78-79; William Shakespeare, *Richard III*, ed. by James R. Siemon (London: Bloomsbury, 2009), pp. 3, 49-51.

能であるが、役の数だけ少年俳優を調達した可能性もあり、いずれにせよ少年俳優に多くの演じる機会が与えられていることがわかる⁹⁸⁾。McMillin に倣って4名の女性役のセリフの行数や合図(cue)の数を分析すると、それぞれの特徴が見えてくる⁹⁹⁾。

	行数	合図を与えられる人数	長台詞の行数 (上位3つ)	リチャードとの掛け合い (最大回数)
Elizabeth	266	15	13、13、11	45
Anne	156	5	32、22、18	42
Margaret	218	8	34、27、18	5
Duchess	142	10	15、13、10	9

たとえばエリザベスはセリフの行数と合図を受け取る人数は最も多いが、13行を超える長台詞はない。一方、アンは合図を受け取る人数は最も少なく、セリフの行数も下から2番目だが、32行と22行の長台詞がある。またアンはエリザベス同様、リチャードと40回以上の丁々発止を繰り返すが、二人のやりとりにはグラマースクール教育との接点が見られる。

まず1幕1場と1幕2場冒頭のアンとリチャードの長台詞に注目したい。2つの長台詞ではヨーク家の栄光とランカスター家の影、祝祭と葬列のイメージ、男女の語り手が対置されているが、二人の修辞技法には共通点も見受けられる。

98) William Shakespeare, *The Tragedy of King Richard III*, ed. by John Jowett (Oxford: Oxford University Press, 2000), p. 75.

99) 本作の主なテキストには1597年出版の第1・四つ折版(Q)と1623年出版の第1・二つ折版(F)があり、近年の編纂作業では誤りが少なく韻律が整っているFを底本としつつ、Qとその派生物である他7点の四つ折版のみに記載されているセリフやト書きを、それとわかるように明示して組み込むのが主流となっている。本稿ではQかFいずれかではなく、こうしたすべての上演可能性を記したテキストとしてSiemonを使用する(pp.417-22)。なおハーフラインやシェアードラインも1行として算出した。

O, cursed be the hand that made these holes ;
Cursed the heart that had the heart to do it ;
Cursed the blood that let this blood from hence. (1.2.14-16)

Our bruised arms hung up for monuments,
Our stern alarums changed to merry meetings,
Our dreadful marches to delightful measures. (1.1.6-8)

どちらのセリフにも、行頭に同じ単語を使うアナフォラ (anaphora)、同じ構文を繰り返すパリソン (parison)、行の長さを揃えるアイソコロン (isocolon) が使用されていることがわかる¹⁰⁰⁾。Vickersによれば、グラマースクール出身者はこうした転形 (figure) を 100 は知っており、Brinsleyは転形や転義 (trope) には強勢をおくのが望ましいと述べている: 'Let them also be taught carefully, in what word the Emphasis lyeth; and therefore which is to be eleuated in the pronuntiation. As namely those wordes in which the chiefe Trope or Figure is'¹⁰¹⁾。シェイクスピアは修辞技法の類似性によって、出会う前からアンとリチャードに共鳴する部分があることを示しているわけだが、この類似性は少年俳優への演技指導の上でも有効だったと考えられる。リチャードを演じたのはベテラン俳優の Burbage だが、彼は少年俳優がグラマースクールで学んだであろうこうした修辞技法をふまえつつ、長台詞の言い回しを伝授したとも考えられるのである。アンとリチャードはこうしたメタシアトリカルな意味でも出会う前から絡み合っているのである。

また、1 幕 2 場における二人の応酬が、互いの言葉を流用する点で、『じゃじゃ馬ならし』や『から騒ぎ』などの喜劇のカップルの掛け合いに似ていることはよく知られている¹⁰²⁾。

100) Vickers, 'Shakespeare's Use of Rhetoric', p. 395.

101) Vickers, 'Shakespeare's Use of Rhetoric', p. 394 ; Brinsley, sigs. Ee3^r-Ee4^v.

ANNE. No beast so fierce but knows some touch of pity.
 RICHARD. But I know none, and therefore am no beast.
 ANNE. O, wonderful, when devils tell the truth!
 RICHARD. More wonderful, when angels are so angry.
 Vouchsafe, divine perfection of a woman,
 Of these supposed crimes, to give me leave
 By circumstance, but to acquit myself.
 ANNE. Vouchsafe, diffused infection of ^Qa^Q man,
 Of these known evils, but to give me leave
 By circumstance, to curse thy cursed self. (1.2.71-80,
 my emphasis)

最初はアンも新しい語句や構文を用いてダイアログを主導しており、たとえば上記の引用文では‘No beast’という句が導入されているが、彼女の‘O, wonderful, when devils tell the truth!’という罵りにリチャードが‘More wonderful, when angels are so angry.’と切り返す瞬間から、リチャード主導でアンがその語句や構文を反復するだけの主従関係が固定化される。これはグラマースクールにおいて、生徒が教師の言葉をそのまま復唱する様子に似ているかもしれない¹⁰³⁾。

実際、リチャードはアンを天使、自分を罪深い人間にみたと、彼女が救いを与えるという名目で再婚を受け入れるための役割演技を始める。彼はこの芝居の演出家であり、生徒に口跡と身振りを指導する教師でもある。このことは次のセリフに読み取れる。

But, gentle Lady Anne,

102) William Shakespeare, *Taming of the Shrew*, ed. by Barbara Hodgdon (London: Bloomsbury, 2010), p. 204.

103) Enterline, pp. 99-101.

To leave this keen encounter of our wits

And fall something into a slower method : (1.2.117-19)

*OED*によれば *method* は雄弁術の用語であり、考えや議論を効果的に整理する方法を指す¹⁰⁴⁾。リチャードは教師が生徒を導くように、機知に富んだダイアローグの練習から、議論を整理する別の練習に移り、エドワードの死の原因 ('the causer' (1.2.120)) は誰かという核心に迫るのである。またこの場面は身振りも多く、アンは愛を語るリチャードに唾を吐きかけ、軽蔑の目で見据え、胸を開いたリチャードに剣を向ける。

^QShe^Q spits at him. (1.2.147 s.d.)

She looks scornfully at him. (1.2.173 s.d.)

He [kneels and] lays his breast open, she offers at [it] with his sword.
(1.2.181 s.d.)

しかし彼女は剣を落としてしまい ('She falls the sword' (1.2.185 s.d.)), リチャードはこの美しい復讐劇の完遂を望むかのように再び剣を握らせてこう述べる: 'Nay, do not pause; [...] Take up the sword again, or take up me' (1.2.184-86)。アン (少年俳優) が復讐劇を演じ損ねたことは、リチャード (ベテラン俳優の Burbage) の勝利も意味しているのである。

一方、アンから自由を奪った言葉の模倣は、それまで敵対していたランカスター家とヨーク家の女性たちを結びつけるきっかけにもなる。4幕1場ではエリザベスと公爵夫人がロンドン塔に監禁された王子たちを訪ねるも、リチャードの命令で面会を拒絶されてしまう。二人は強く抗議するが、ここにアンは声を連ねるのである。

104) 'method, n.', in Oxford English Dictionary <<https://www.oed.com/view/Entry/117560?rskey=viLjKd&result=1&isAdvanced=false>> [accessed 16 August 2023].

Q. ELIZABETH. I am their mother. Who shall bar me from them?
DUCHESS. I am their father's mother. I will see them.
ANNE. Their aunt I am in law, in love their mother.
(4.1.21-23, my emphasis)

元ランカスター家の人間で、子供のいないアンがヨーク家の母親たちと 'mother' として名を連ねるとき、女性たちははじめて互いへの憐れみを口にする。

Q. ELIZABETH. Poor heart, adieu. I pity thy complaining.
ANNE. No more than with my soul I mourn for yours.
(4.1.87-88)

このようにアンの模倣する力は最終的に女性たちを結びつけ、リチャードの暴政に歯向かう原動力ともなるのである。

6. 結 び

本稿ではシェイクスピアの劇団である宮内大臣一座／国王一座の少年俳優が入団前に習得していたと思われるスキルをグラマースクールのカリキュラムから明らかにし、それをシェイクスピアがどのように戯曲に生かした可能性があるかを論じた。少年俳優の学歴については不明な点が多く、すべての少年俳優がグラマースクールを修了したとまではいえないものの、雄弁術における口跡や身振りの指導、そして架空の女性に自らを重ねて思考したり発言したりする訓練は、将来の少年俳優にとって有益であったと考えられる。実際、シェイクスピアは複数の戯曲においてこうした技術や知識を活用しているようにも見受けられる。

先述の通り、Hill は戯曲を〈教材〉とみなした先駆的な研究で、Burbage ら成人俳優と異なり、少年俳優の演技は未熟で、複雑な心情を演

じるのが困難だったと述べた。むろんこうした未熟さも指摘できる一方、グラマースクールのカリキュラムは彼らが入団前からかなりの演劇的素養、女性を演じる素地を身につけていたことを示唆する。初期近代イングランドにおける学校教育と劇場の関連性は伝統的なトピックだが、少年俳優を切り口とすることで、なお広がりを見せるのではないだろうか。

参考文献

- Anon., *Illuſtrium poetarum flores* (London, 1598).
- Ascham, Roger, *The Scholemaster* (London, 1570).
- Astington, John H., *Actors and Acting in Shakespeare's Time: The Art of Stage Playing* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010).
- Baldwin, T. W., *The Organization and Personnel of the Shakespearean Company* (Princeton: Princeton University Press, 1927).
- , *Shakespeare's Small Latine & Lesse Greeke*, 2 vols (Urbana: University of Illinois Press, 1944).
- Barbour, Richmond, "'When I Acted Young Antinous": Boy Actors and the Erotics of Jonsonian Theater', *PMLA*, 110.1 (1995), 1006-22.
- Barrie, Robert, 'Elizabethan Play-Boys in the Adult London Companies', *SEL*, 48.2 (2008), 237-57.
- Bate, Jonathan, *Shakespeare and Ovid* (Oxford: Clarendon Press, 1993).
- Belsey, Catherine, 'Shakespeare's Little Boys', in *Rematerializing Shakespeare*, ed. by Bryan Reynolds and William N. West (London: Palgrave, 2005), pp. 53-72.
- Ben-Amos, Ilana Krausman, *Adolescence and Youth in Early Modern England* (New Haven: Yale University Press, 1994).
- Brinsley, John, *Ludus literarius* (London, 1612).
- Butler, Charles, *Rhetoricæ libri duo* (Oxford, 1598).
- Casey, Jim, "'Honest payneful pastimes": Pain, Play, and Pedagogy in Early Modern England', in *Performing Pedagogy in Early Modern England: Gender, Instruction, and Performance*, ed. by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson (London: Routledge, 2016), pp. 87-99.
- Chamberlaine, Edward, *Angliæ notitia: or, The Present State of England* (London, 1676).
- Chambers, E. K., *The Elizabethan Stage*, vol. 2 (Oxford: Clarendon Press, 1923), p. 213.
- Charlton, Kenneth, *Education in Renaissance England* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965).
- Cressy, David, 'Educational Opportunity in Tudor and Stuart England', *History of Education Quarterly*, 16.3 (1976), 301-20.
- Davies, W. Robertson, *Shakespeare's Boy Actors* (London: J. M. Dent, 1939; repr.

- New York : Russell & Russell, 1964).
- Edmond, Mary, 'Burbage [Burbadge], Richard (1568-1619), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3951>> [accessed 20 August 2023].
- Enterline, Lynn, *Shakespeare's Classroom : Rhetoric, Discipline, Emotion* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2012).
- Fleay, Frederick Gard, *A Chronicle History of the London Stage, 1559-1642* (London : Reeves and Turner, 1890).
- Gordon, Peter, and Denis Lawton, *Dictionary of British Education* (London : Woburn Press, 2003).
- 'grammar school, n.', in *Oxford English Dictionary* <<https://www.oed.com/view/Entry/80580?redirectedFrom=grammar+school>> [accessed 16 August 2023].
- Grantley, Darryll, *Wit's Pilgrimage : Drama and the Social Impact of Education in Early Modern England* (Aldershot : Ashgate, 2000).
- Griffith, Eva, 'Ecclestone, William (d. c. 1624), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-8441>> [accessed 21 August 2023].
- 'The Guild Buildings of Shakespeare's Stratford-upon-Avon', Internet Archaeology (University of York) <<https://intarch.ac.uk/journal/issue44/6/4-2.html>> [accessed 19 August 2023].
- Gurr, Andrew, *The Shakespeare Company, 1594-1642* (Cambridge : Cambridge University Press, 2004).
- Halpern, Richard, *The Poetics of Primitive Accumulation : English Renaissance Culture and the Genealogy of Capital* (Ithaca : Cornell University Press, 1991).
- Harrison, William, *The Description of England : The Classic Contemporary Account of Tudor Social Life*, ed. by Georges Edelen (New York : Dover Publications, 1994).
- 'Henry VIII : May 1545, 6-10', in *Letters and Papers, Foreign and Domestic, Henry VIII, Volume 20 Part 1, January-July 1545*, ed. by James Gairdner and R. H. Brodie (London : His Majesty's Stationery Office, 1905), pp. 343-364. *British History Online* <<http://www.british-history.ac.uk/letters-papers-hen8/vol20/no1/pp343-364>> [accessed 19 August 2023].
- Heywood, Thomas, *An Apology for Actors* (London, 1612).
- Hill, James L., "'What, are they children?'" Shakespeare's Tragic Women and the Boy Actors', *SEL*, 26.2 (1988), 418-40.
- 'History of the School', King Edward VI School <<https://www.kes.net/about-us/history-of-the-school/>> [accessed 19 August 2023].
- 'History', The King's School Canterbury <<https://www.kings-school.co.uk/about/history/>> [accessed 16 August 2023].
- Honigmann, E. A. J., *Shakespeare : the 'lost years'* (Manchester : Manchester

- University Press, 1985).
- Hoole, Charles, *A New Discovery of the Old Art of Teaching Schoole, in Four Small Treatises* (London, 1661).
- Jardine, Lisa, *Still Harping on Daughters: Women and Drama in the Age of Shakespeare* (Brighton : Harvester, 1983).
- Johnson, Francis R., 'Two Renaissance Textbooks of Rhetoric : Aphthonius' "Progymnasmata" and Rainolde's "A Booke Called the Foundation of Rhetorike"', *Huntington Library Quarterly*, 6.4 (1943), 427-44.
- Kathman, David, 'Grocers, Goldsmiths, and Drapers : Freemen and Apprentices in the Elizabethan Theater', *Shakespeare Quarterly*, 55.1 (2004), 1-49.
- , 'How Old Were Shakespeare's Boy Actors?', *Shakespeare Survey*, 58 (2005), 220-46.
- , 'John Rice and the Boys of the Jacobean King's Men', *Shakespeare Survey*, 68 (2015), 247-66.
- , 'Reconsidering *The Seven Deadly Sins*', *Early Theatre*, 7.1 (2004), 13-44.
- Kelly, Katherine E., 'The Queen's Two Bodies : Shakespeare's Boy Actress in Breches', *Theatre Journal*, 42.1 (1990), 81-93.
- Kempe, William, *The Education of Children in Learning* (London, 1588).
- Knowles, Katie, *Shakespeare's Boys : A Cultural History* (Basingstoke : Palgrave Macmillan, 2014).
- Madelaine, Richard, 'Material Boys : Apprenticeship and the Boy Actor's Shakespearean Roles', in *Shakespeare Matters : History, Teaching, Performance*, ed. by Lloyd Davis (Newark : University of Delaware Press, 2003), pp. 225-38.
- McCarthy, Harry R., *Boy Actors in Early Modern England : Skill and Stagecraft in the Theatre* (Cambridge : Cambridge University Press, 2022).
- McLuskie, Kathleen, 'The Act, the Role, and the Actor : Boy Actresses on the Elizabethan Stage', *New Theatre Quarterly*, 3 (1987), 120-30.
- McMillin, Scott, 'The Sharer and His Boy : Rehearsing Shakespeare's Women', in *From Script to Stage in Early Modern England*, ed. by Peter Holland and Stephen Orgel (London : Palgrave, 2004), pp. 231-45.
- 'method, n.', in *Oxford English Dictionary* <<https://www.oed.com/view/Entry/117560?rskey=viLjKd&result=1&isAdvanced=false>> [accessed 16 August 2023].
- Meyer, W. R., 'Hoole, Charles (1610-1667), schoolmaster and author', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-13701>> [accessed 9 February 2023].
- Morgan, John, 'Brinsley, John (bap. 1566, d. in or after 1624), schoolmaster and writer on education', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3440>> [accessed 9 February 2023].
- Mulcaster, Richard, *Positions* (London, 1581).
- Munro, Lucy, *Children of the Queen's Revels : A Jacobean Theatre Repertory*

- (Cambridge : Cambridge University Press, 2005).
- , 'Robinson, Richard (c. 1595–1648), actor', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-75572>> [accessed 21 August 2023].
- Nungazer, Edwin, *A Dictionary of Actors and of Other Persons Associated with the Public Representation of Plays in England before 1642* (New Haven : Yale University Press, 1929).
- O'Day, Rosemary, *Education and Society 1500–1800* (London : Longman, 1982).
- 'Old Boys', Merchant Taylors' School <<https://www.mtsn.org.uk/life-at-taylors/about/old-boys>> [accessed 19 August 2023].
- Ong, Walter J., 'Latin Language Study as a Renaissance Puberty Rite', *Studies in Philology*, 56.2 (1959), 103–24.
- Orgel, Stephen, *Impersonations : The Performance of Gender in Shakespeare's England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1996).
- Rainolde, Richard, *A Booke Called the Foundation of Rhetorike* (London, 1563).
- Rutter, Carol Chillington, 'Learning Thisby's Part – or – What's Hecuba to Him?', *Shakespeare Bulletin*, 22.3 (2004), 5–30.
- Shakespeare, William, *The Merry Wives of Windsor*, ed. by Giorgio Melchiori (London : Bloomsbury, 2000).
- , *The Norton Shakespeare*, gen. ed. Stephen Greenblatt, 3rd edn (New York : W. W. Norton, 2016).
- , *Richard III*, ed. by James R. Siemon (London : Bloomsbury, 2009).
- , *Taming of the Shrew*, ed. by Barbara Hodgdon (London : Bloomsbury, 2010).
- , *Titus Andronicus*, ed. by Jonathan Bate (London : Bloomsbury, 1995).
- , *The Tragedy of King Richard III*, ed. by John Jowett (Oxford : Oxford University Press, 2000).
- Sherry, Richard, *A Treatise of Schemes and Tropes* (London, 1550).
- Simon, Joan, *Education and Society in Tudor England* (Cambridge : Cambridge University Press, 1967).
- Smith, R. D., and Hedwig Gwosdek, 'Lily, William (1468?–1522/1523), grammarian and schoolmaster', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-16665>> [accessed 18 August 2023].
- Stallybrass, Peter, 'Transvestism and the "body beneath" : Speculating on the Boy Actor', in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 64–83.
- Stout, William, *The Autobiography of William Stout of Lancaster, 1665–1752*, ed. by J. D. Marshall (New York : Manchester University Press, 1967).
- Stowe, A. Monroe, *English Grammar Schools in the Reign of Queen Elizabeth* (New York : Teachers College, Columbia University, 1908).

- Trapp, J. B., 'Colet, John (1467-1519), Dean of St Paul's and Founder of St Paul's School', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-5898>> [accessed 18 August 2023].
- Tribble, Evelyn, 'Marlowe's Boy Actors', *Shakespeare Bulletin*, 27.1 (2009), 5-17.
- Twyning, John, 'Dekker, Thomas (c. 1572-1632), playwright and pamphleteer', *Oxford Dictionary of National Biography*, 23 September 2004 <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-7428>> [accessed 20 August 2023].
- Vickers, Brian, 'Shakespeare's Use of Rhetoric', in *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, ed. by Vivian Salmon and Edwina Burness (Amsterdam : John Benjamins, 1987), pp. 391-406.
- , 'Some Reflections on the Rhetoric Textbook', in *Renaissance Rhetoric*, ed. by Peter Mack (New York : St. Martin's Press, 1994), pp. 81-102.
- Watson, Foster, *The English Grammar Schools to 1660: Their Curriculum and Practice* (Cambridge : Cambridge University Press, 1908).
- , *Richard Mulcaster and His Elementarie* (London : C. F. Hodgson & Son, 1893).
- Whitelocke, Sir James, *Liber famelicus*, ed. by John Bruce (London : Camden Society, 1858).
- Woods, Marjorie Curry, 'Weeping for Dido : Epilogue on a Premodern Rhetorical Exercise in the Postmodern Classroom', in *Latin Grammar and Rhetoric : From Classical Theory to Medieval Practice*, ed. by Carol Dana Lanham (London : Continuum, 2002), pp. 284-94.
- Wrigley, E. A., and R. S. Schofield, *The Population History of England 1541-1871 : A Reconstruction* (Cambridge : Cambridge University Press, 1981).
- Young, William, *The History of Dulwich College*, 2 vols (London : Morrison & Gibb, 1889).
- Zimmerman, Susan, 'Disruptive Desire : Artifice and Indeterminacy in Jacobean Comedy', in *Erotic Politics : Desire on the Renaissance Stage*, ed. by Susan Zimmerman (London : Routledge, 1992), pp. 39-63.
- ウエルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001年。
- 梅田倍男『シェイクスピアのレトリック』英宝社、2005年。
- オウイディウス『ヘーローイデス：女性たちのギリシア神話』高橋宏幸訳、平凡社、2020年。
- 聖アウグスティヌス『告白』上巻、服部英次郎訳、岩波文庫、1976年。